

戦前期朝鮮半島の食料貿易と米自給

—主要税関資料による検討—

荒木 一 視

Prewar food trades and Japan's rice self-sufficiency:
A consideration based on the major customs records of Korea

ARAKI Hitoshi

(Received September 26, 2014)

I はじめに

著者の関心は、近代日本の工業化の進展を工業労働者に対する安価な食料の供給体系の構築という側面からとらえ、食料供給体系の安定した運用をアジアの植民地経営との関連で読み解こうとすることにある。第二次世界大戦前の内地向けの米の2大供給地は朝鮮半島と台湾であるが、すでに台湾との農産物・食料貿易についてはフードレジーム論を踏まえた検討をおこなった(荒木, 2014)。本稿では朝鮮半島を取り上げ、とくにその食料貿易に焦点を当てることを通じて、当時の日本の食料供給体系を検討する。対象とした具体的な時期は第一次大戦終了後の1920年代初め(大正10年頃)から第二次大戦開戦前夜の1939(昭和14)年までであり、本稿という戦前はおおむねこの時期を指す。

この時期の日本の食料供給体系に着目した理由を既往研究を踏まえつつ示したい。明治～大正期にかけて、工業化を進める日本の米供給の不足を支えたのは東南アジア地域からの輸入米であった。しかし、第一次大戦末の米騒動は、それまでの東南アジアからの輸入米に依存するという日本の食料供給体系に大きなインパクトを与え、米の供給政策が大きく変更される(牛山1980, 持田1969)。すなわちそれまでの外国米依存に対して、他国の政治経済的な情勢に左右されることのない安定的な食料供給をはかるために、植民地域内で完結性の高い米供給をめざすというものである。1920年代を通じて植民地域内での米の増産が図られ、域内での自給体制の確立をみる。それは、増加し続ける都市住民、工業労働者向けの安定した食料供給を賄うための仕組みでもあった(野田編2013a, b)¹⁾。逆に1930年の豊作と大恐慌は米価問題を深刻化させた。むしろ、食料(米)の量的確保という側面よりも、価格維持という側面が懸念される状況が顕在化した。このように一見、安価な米の供給体系が実現していたように見えるが、1939年の朝鮮半島における干ばつを境に朝鮮米移入は急減する。以降1940年代には米の東南アジア依存へとシフトするものの、戦争の進行とともに食料需給は逼迫し、終戦を迎える(大豆生田1984, 1993a, b)。1939年以降の変化は急であるが、1920～30年代はおおむね植民地からの米供給体制を確立し、安定的な食料供給体制の構築をめざし、実際にそれが機能した時期といえる。

この時期の供給体制を担ったのが植民地であった朝鮮半島と台湾で、朝鮮半島からの移入が当時の米需要の一翼を担っていたわけである。しかし、これをもって単純に植民地域内での食

料供給体系の構築ととらえられるだろうか。実際に安定的な食料供給体系は実現されていたといえるのであろうか。本研究では、戦前のこの時期に構築されたかのようにみえる植民地域内による安定的な米供給体系の実態を、朝鮮半島の主要港の食料を中心とする貿易データに基づいて解き明かそうとするものである。これによって、果たして植民地域内の米供給体制が十分に安定的であったのか、どのような問題を抱えていたのかを検討し、1920～30年代にかけて機能した植民地域内の供給体制が1939、1940年に突如として崩壊した背景にもアプローチしたい。同時にそれは海外依存度を高める今日の日本の食料供給の在り方に対しても効果的な示唆を与えうると考えた。本研究が1920年代と30年代に着目するのは、まさにその時期が植民地域内の米供給が機能していたとみなされる時期だからである。

なお、上記の経済史分野の研究に加えて、地理学における先行研究として樋口（1988）が特筆される。戦前の朝鮮半島の米生産とその流通、大阪を中心としたその消費にいたる研究は食料と植民地を巡る優れた成果であった。その後このような研究が地理学において広がりを見せることはなかったが、食料の地理学の立場からも高く評価できる。本研究もその観点を踏襲したい。

Ⅱ 戦前期朝鮮半島の主要貿易港

当該時期の朝鮮半島の主要港は図1に、貿易額の推移は図2に示される。仁川は京城の、鎮

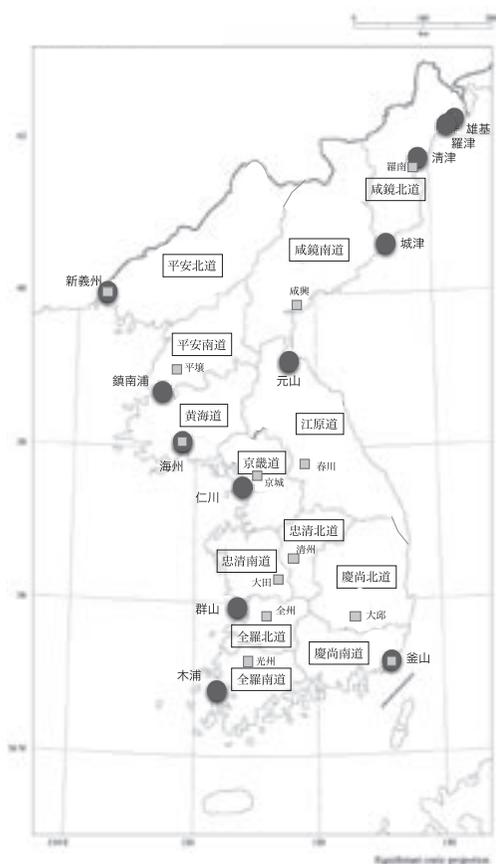


図1 主要港の位置

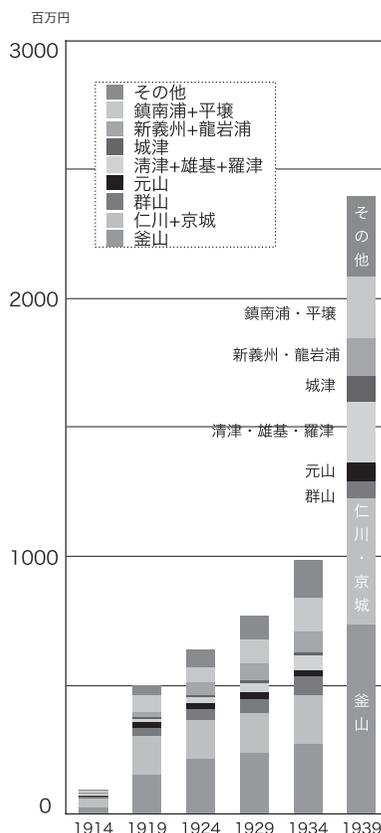


図2 主要港別貿易額の推移（百万円）
資料 釜山港貿易概覧、釜山港統計要覧

表1 港別貿易額のシェア

輸移出 年次	米				大豆				海産物			
	1914 (大正3)	1919 (大正8)	1925 (大正14)	1929 (昭和4)	1914 (大正3)	1919 (大正8)	1925 (大正14)	1929 (昭和4)	1914 (大正3)	1919 (大正8)	1925 (大正14)	1929 (昭和4)
釜山	28.3	42.1	29.4	20.8	45.0	56.3	12.4	5.3	70.7	57.3	43.4	42.0
仁川	14.5	16.4	25.4	20.9	21.5	13.6	30.0	28.5	3.3	2.2	2.4	2.1
群山	37.0	21.4	21.9	22.6	0.6	0.6	1.3	0.9	0.2		0.1	
鎮南浦	10.5	6.6	10.6	17.6	14.1	7.5	16.9	13.3	0.8	1.0	1.7	0.7
元山	0.4	1.3	2.0	0.6	8.3	11.6	12.2	11.1	13.9	5.2	2.9	6.5
木浦	5.7	7.9	7.0	10.2					4.4	6.8	3.4	2.0
新義州及龍巖浦	2.8	0.9	0.6	2.0	3.0	0.1	2.0	3.5	3.2	5.7	1.9	2.1
清津					0.5	2.1	7.0	21.8	0.8	4.5	10.8	12.8
城津	0.2				5.7	6.1	6.7	6.0		1.0	1.8	2.5
その他	0.6	3.5	3.0	5.3	1.3	0.4	10.8	6.7	2.6	18.3	31.6	29.3
合計	1,332,008	2,750,845	4,561,263	5,540,955	536,737	1,238,733	1,004,768	1,370,342	2,901,490	17,410,915	24,180,565	33,734,298
単位	石	石	石	石	石	石	石	石	円	円	円	円
輸移入 年時	米				小麦粉				塩	綿織物	石炭	
	1914	1919	1925	1929*	1914	1919	1925	1929	1925	1925	1925	
釜山	57.9	44.1	25.2	23.1	30.1	18.4	25.3	22.0	28.0	19.3	18.5	
仁川	10.9	5.0	24.2	26.1	23.0	29.4	33.9	18.6	25.5	34.0	7.7	
群山	6.7	0.3	24.0	20.2	6.4	6.2	7.0	9.3	11.9	10.4	0.1	
鎮南浦	0.2	3.9	1.0	7.4	2.4	2.1	4.3	4.9	9.7	0.7	21.8	
元山	10.1	1.4	0.7	0.9	4.3	2.4	6.4	8.4	2.5	6.4	0.1	
木浦	5.8	1.5	8.7	7.4	3.8	1.3	4.4	5.8	0.7	3.0	2.1	
新義州及龍巖浦	0.1	36.5	7.3	6.9	3.0	8.9	0.1	0.5	10.6	0.6	44.7	
清津	3.3	0.9	5.1	0.6	5.3	4.2	8.1	10.5	2.9	2.8		
城津	2.6	0.2	0.8	0.1	1.3	0.5	1.7	2.0		2.5		
その他	2.3	6.0	2.9	7.3	1.9	2.7	8.9	18.0	8.1	20.3	3.9	
合計	665,865	111,100	2,222,986	1,646,163	21,643,460	31,245,057	48,302,045	64,186,231	2,566,654	46,831,594	672,818	
単位	百斤	百斤	百斤	百斤	斤	斤	斤	斤	百斤	円	トン	

資料：釜山港経済統計要覧

* 斜字体の1929年は輸移入外国米であり、台湾米、内地米を含まない。

南浦は平壤の外港であり、図中では貿易額を合算している。また、清津、雄基、羅津はいわゆる「北鮮三港」とよばれた港で、日本海経由で内地と満州・中国東北部（以下国名としては満州国、地域の範囲としては東北部を使用した。）を結ぶルートであった。図中では合算して示し、同様に新義州と龍岩浦も合算した。貿易額は年を追うごとに拡大し、とくに1910年代の第一次世界大戦期と1930年代後半の拡大は顕著である。港湾の規模別では釜山と仁川を2大貿易港として、これに鎮南浦や新義州、群山などが続くという枠組みに大きな変化はない。あえていえば1930年代後半にいわゆる「北鮮三港」のシェアが拡大することや群山の位置が相対的に後退することなどがあげられる。

また表1は1920年代までの主要貿易品の港湾別のシェアを示したもので、港湾の性格を把握することができる。期間を通じて釜山、仁川、群山は主要な米の積出港で、1914年には群山、1919年には釜山が大きなシェアを占めるが、1920年代前半には仁川、後半には鎮南浦がそれぞれシェアを伸ばしている。また、図2と照らし合わせると、群山の貿易において米の占める位置が大きく、内地への米移出に特化していることが推察される。一方、米の入荷に関しては、期間の前半では釜山が5割のシェアを持つが、後半には輸移入量が拡大するとともに仁川や群山の成長が認められる。いずれにしても米に関しては輸移出入の双方において、釜山、仁川、群山が中心的な役割を果たしていたといえる。輸移出大豆では期間の前半は釜山が約半量を取り扱う重要積出港であったが、後半には仁川や清津にその位置を奪われ、とくに清津の急成長を指摘できる。一方、輸移出海産物では釜山が期間を通じて圧倒的な位置を占める。輸移入小麦は釜山と仁川が期間を通じて主要な入荷港としての位置を保つとともに、清津の成長も認められる。

ここでは以上の主要な貿易港から、港湾別の資料が入手できた釜山、仁川、新義州および清津を取り上げて、朝鮮半島を巡る食料貿易の状況を描き出したい。資料とは山口大学経済学部東亜経済研究所に所蔵されている戦前期の統計や貿易統計であり、前章に示した問題意識に従い1920年代から30年代にかけての品目別の貿易状況が把握できるものを渉猟した。具体的には釜山港に関しては釜山商業会議所による『釜山港経済統計要覧（大正15年、昭和4年）』、釜山税関による『釜山港貿易概覧（昭和8年、14年）』、仁川港に関しては仁川税関による『仁川税関貿易要覧（大正14年版、昭和8年版、及び昭和12,13,14年版）』、新義州港に関しては新義州税関による『新義州税関貿易要覧（大正13,14,15年、昭和14年）』および『新義州貿易概覧（昭和5年）』、清津港については清津商工会議所による『清津港貿易統計要覧（昭和7年）』である。すべての年次の統計がそろっているわけではないが、おおむね1920年代半ば（昭和元年前後）、1930年代初め（昭和8年頃）、及び1930年代終わり（昭和14年頃）の3時点における動向を把握することができた。以下、港湾別に検討を加える。

Ⅲ 釜山港

前章に見たように釜山港は朝鮮半島最大の貿易港で、米や海産物の貿易において大きなシェアを持っている。1884（明治17）年の開港以来の貿易額の推移を示した図3によれば、1914～18年にかけての第一次大戦による大戦景気と1920年からの戦後恐慌、さらに1929年に端を発する世界恐慌の影響を受けた変動は認められるものの、同港の順調な拡大がうかがえる。ただし、貿易額全体に占める外国貿易の比率は決して大きくなく、各年度ともに輸移出入に占める輸出入の割合は数%以下が大勢を占めている（表2）。

表2には表1以降の動向を中心とした主要貿易品目を示している。これによると1925（大正14）年の主要な輸移出品目としては玄米や精米であり、移輸出額合計の4割を占める。米以外では柞蚕糸、繭、生糸、生牛、大豆、海産物などが一定の金額を持っている。一方、輸移入品目でも米及び粳が大きな位置を占めるが、その多くが外国米である。次いで食料としては小麦粉、菓子などが挙げられる。工業品・原料としては綿織糸、生金巾及生シーチング、機械類、自動車部品、ゴム製靴などがある。

これに続く1929（昭和4）年の主要輸移出品目においても、約3割を米及び粳が占める²⁾。また、品目でも海産物や繭、生糸、柞蚕生糸、牛、肥料など大きな変化はない。輸移入品目においても大きな変化は無いが、米については表1に見たように、期間の後半には前半ほどの大きなシェアは失っており、この時期に港湾機能の変化が認められる。

同様に、1933（昭和8）年でも輸移出額の3割余を占める米及び粳が中心である。この年の

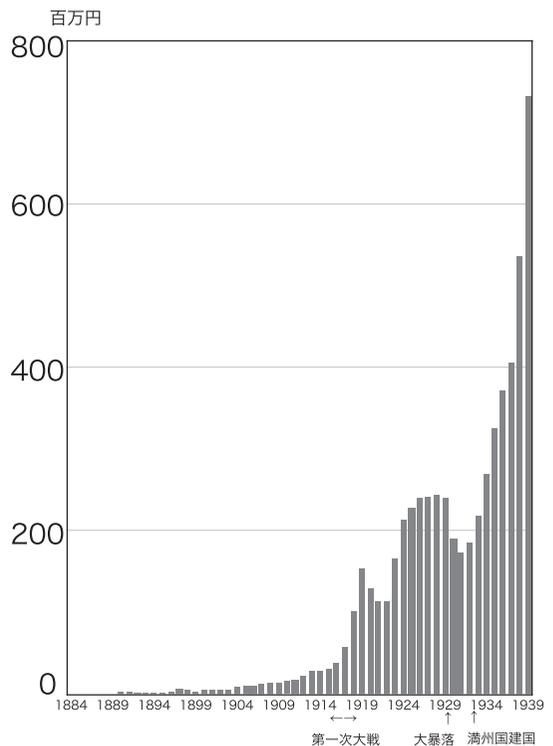


図3 釜山港貿易額の推移 (百万円)
資料：『釜山港経済統計要覧』『釜山港貿易概覧』

表2 釜山港主要貿易品目の変化

1925 (大正14) 年				1929 (昭和4) 年				1933 (昭和8) 年				1939 (昭和14) 年			
主要品目	価額 (円)	量	単位	主要品目	価額 (円)	量	単位	主要品目	価額 (円)	量	単位	主要品目	価額 (円)	量	単位
輸出				輸出				輸出				輸出			
玄米	35,564,812	977,374	石	米及び粳	31,152,186			米及び粳	30,441,055			水産物	2,586,716	7,499,627	斤
精米	14,196,524	347,103	石	海産物	11,056,469			生糸	12,268,288			果実及び核子	2,468,975	24,870,834	斤
米及び粳 (計)	50,358,514	1,341,187	石	乾魚	4,282,948			海産物	5,420,064			人絹	1,010,032	2,452,983	方碼
柞蚕糸	18,371,127			海苔	3,715,295							鉄道客車及び貨車	30,604,399	140	輛
まゆ	9,771,054			蕨	4,284,222							木材	1,127,549		
生糸	8,680,013			生糸	20,142,679							輸出額計	24,795,741		
生牛	2,752,425			柞蚕生糸	9,397,095							移出			
大豆	2,484,326			牛	2,268,000							米及び粳	46,646,007	1,313,964	石
海苔	2,140,699			肥料	1,632,324							リンゴ	4,019,813	19,309,010	斤
乾鹽	1,831,405											水産物	13,669,081	38,588,446	斤
鮮魚	1,338,872											生糸	22,804,727	1,604,546	斤
水産物計	7,936,580											柞蚕生糸	7,945,146	1,475,950	斤
												鋳	10,604,910	219,248	百斤
												含金銀粗銅	51,092,273		
												移出額計	260,112,464		
輸出額計	124,040,334			輸出額計	109,709,636			輸出額計	88,576,768			輸出額計	284,908,205		
(うち輸出額)	(1,433,874)			(うち輸出額)	(2,820,169)			(うち輸出額)	(2,820,169)						
輸入				輸入				輸入				輸入			
米及び粳	6,216,604	559,494	百斤	米及び粳	3,289,312			米及び粳	516,120			生ゴム	674,338	801,177	斤
うち外国米	4,851,727	462,329	百斤	小麦粉	1,497,582			小麦粉	586,362			豆類	603,144	46,932	百斤
うち台湾米*	1,248,026	90,409	百斤	生果	1,656,592			菓子	1,059,877			繰綿	1,784,879	45,504	百斤
小麦粉	1,649,119	12,212,985	斤	靴	6,007,986			生果	1,672,035			輸入額計	10,245,304		
菓子	1,046,742			鉄	2,666,063			繰綿	6,921,716			移入			
綿織糸	6,629,195			機械類	5,095,530			綿織物	7,768,376			米及び粳	2,892,120	182,470	百斤
生命巾及び生シーチング	3,313,560			肥料	4,187,739			機械類	4,408,674			裸麦	2,776,319	234,569	百斤
機械類	3,332,911										菓子	3,880,971			
自動車部品	2,013,939										生果	7,596,352	69,630,672	斤	
ゴム製靴	2,284,870										鋳油	3,831,049			
											その他の薬材化学薬製薬及配合品	11,565,342			
											爆発薬	5,166,081			
											綿織物	1,618,838	3,132,445	方碼	
											毛織物	2,811,086	1,039,190	方碼	
											絹織物	22,005,021	35,161,653	方碼	
											洋服	16,557,132			
											肌衣	17,850,013			
											帽子	7,713,057			
											長靴及短靴	6,219,923			
											書籍及び雑誌	5702395			
											石炭	5,663,957			
											鉄	10,274,378			
											絶縁電線	3,179,434			
											工匠具農具及用部分品	4,046,458			
											その他の金属製品	29,106,483			
											鉄道車両及び同部分品	11,475,994			
											自動車及び同部分品	7,811,981			
											自転車及び同部分品	4,801,386			
											機械類	52,136,209			
											木材	11,340,450			
											木製品	4,443,417			
											移入額計	437,355,870			
輸入額計	103,572,291			輸入額計	130,387,362			輸入額計	129,984,080			輸入額計	447,601,174		
(うち輸入額)	(6,259,804)			(うち輸入額)	(4,610,934)			(うち輸入額)	(4,610,934)						

貿易総額	227,612,625
外国貿易総額	7,693,678
内訳	
中国	2,794,862
アメリカ	1,795,470
蘭印	1,481,551

貿易総額	240,096,998
外国貿易総額	10,945,417
内訳	
中国	3,355,242
アメリカ	2,359,795
英印	1,254,309
仏印	1,139,004
(参考)	
移出先	
内訳	
大阪	60,126,613
神戸	21,123,126
下関	16,103,188
横浜	13,080,130
東京	13,032,532

資料：釜山港貿易概観

* 台湾は国内扱いのため、外国米には含まない。

輸出先は前年に建国した満州国が最大で625,609円、次いで中華民国が579,148円となっているが、前年の首位の中華民国向けが587,167円であったことと比較すると満州国向けの大きな伸びを指摘できる³⁾。輸移入額も1925年と比較してやや増加しているものの、増加分では繰綿、綿織物、機械類などの比重が大きく、相対的に食料品の占める比率は下がっている。

1939 (昭和14) 年も、輸移出では米及び粳、水産物、生糸などが一定の貿易量を保っている。全体の額が大きく増加するなかで食品類のシェアは少なくなっているものの、直前の1928年

の米及び粉の輸移出の実績は2,631,781石であり、この年は半減したことになる。一方、水産物の前年度の輸移入実績は31,842,057斤と増加していることから、米において大きな変動があったことがうかがえる。その要因として第1に考えられるのが、1939年の朝鮮半島の干ばつ・凶作の影響である。輸移入でも米及び粉、裸麦、菓子、生果などが食料品の中心であることに変化はないが、工業製品の移入額が大幅に伸びているため、食品の全体に占める比率はさらに小さくなっている。ただし、前項と同様に前年（1938年）の米及び粉の移入量は32,942百斤にすぎず、当年に大幅に増加したことがうかがえ、その背景には干ばつの影響を想定できる。また1939年の米及び粉の仕出し地別では台湾94,568百斤、内地87,902百斤と拮抗しているが、前年は内地米が台湾米の2倍以上の移入量をもっており、急遽台湾からの米の調達のおこなわれたことがうかがえる。あるいは米不足による米価の高騰に対応して米が移送されたともみることが出来る。同様に、裸麦は前年の25,471百斤と比較して10倍以上の増加を示すこと、小麦粉は7,741,034斤から94,212斤と大きく減少し、食料を巡る混乱がうかがえる。

以上のように釜山港は大きな貿易額を誇るが、そのほとんどが内国貿易（移出入）が主体である。期間のはじめは米移出入が大きな位置を占めていたものの、後半には工業製品の貿易額が大きくなり、米をはじめとした食料は一定のシェアを保ちつつも、その比重は小さくなっていく。しかし、米の輸移出量そのものは減っているわけではなく、期間を通じて相当量の米の移出になっていることは明白である。同様に、移入においても工業製品の増加によってシェアは下がっているが、米や小麦粉をはじめとした食料の入荷においては期間を通じて一定量を維持してきた。また、1939年の短期間での大きな食料貿易の変動も確認することができた。

IV 仁川港

仁川港は釜山港に次ぐ貿易港で、表1にみたように、米や大豆の主要な積出港、小麦粉の入荷港でもある。ここでは表3に基づいて貿易の動向を検討する。同港も釜山港ほどではないが、内地との貿易が外国貿易を大きく上回っている。

1925（大正14）年の主要な輸移出品目は米で総額の7割以上を占める。これに次ぐのが大豆、人参、牛皮などである。一方、輸移入では米及び粉、小麦粉、葉煙草等が農産物としてあげられる。ほかに工業製品として支那麻布、生金巾および生シーチング、晒金巾および晒シーチング等の繊維製品がある。この時期は輸移出入の双方において、米を中心とした食料が重要な品目であったことがうかがえる。ついで、1933（昭和8年）には世界恐慌の影響か貿易額はやや減少しているものの、輸移出の約65%を玄米、精米が占め、米が占める重要性は変わっていない。これに次ぐのが大豆で、牛皮や人参も一定額は保持しているが、1925年よりは比重を下げている。代わって活牛、糠（肥料）などの伸びが認められる。輸移入品では米及び粉、小麦、小麦粉などは1925年に比べて比重を下げ、代わって麦酒が伸びている。また、工業製品でも生金巾および生シーチング、晒金巾および晒シーチング等は比重を下げ、代わって紙類、機械類等の伸びが認められる。

1939（昭和14）年には図2にも示したように貿易額が大きく増加する。輸移出では玄米、精米、大豆などが一定の比重を占め、量的には1933年と比べても増加しており、一定の位置を占めているようにみえる。しかし、表では示されていないが、1937年は玄米232千石、精米1,076千石、1938年は玄米1,453千石、精米1,317千石の実績があり、むしろ1939年の玄米173千石、精米715千石は大きく輸移出が減少したといえる。その背景には1939年の朝鮮半島の干ばつによる生産量の減少と価格の高騰が考えられる。それ以外では活牛は減少するものの、牛皮、

表3 仁川港主要貿易品目の変化

1925 (大正14) 年		1933 (昭和8) 年		1939 (昭和14) 年			
主要品目	金額 (円)	単位	主要仕向地・仕出地 (シェア:%) *	主要品目	金額 (円)	単位	主要仕向地・仕出地 (シェア:%) *
輸移出							
玄米	11,071,872	294,070 石	大坂(41.7), 名古屋(13.9), 東京(13.4)	玄米	4,065,739	198,316 石	大坂(75.5), 東京(9.9), 神戸(6.3)
精米	35,134,696	828,230 石	大坂(79.1), 神戸(4.2)	精米	24,082,675	1,174,660 石	大坂(74.9), 神戸(7.6), 東京(2.9)
大豆	6,618,017	302,091 石	大坂(28.6), 名古屋(9.2), 門司(7.6)	大豆	4,958,174	380,273 石	大坂(14.7), 神戸(10.3), 名古屋(7.7)
人参	1,805,467	44,315 斤		人参	205,829	13,174 斤	
牛皮	1,008,748	1,604,884 斤	大坂(57.3), 神戸(29.6), 東京(7.1)	牛皮	369,899	1,031,929 斤	大坂(90.6)
				活牛	934,570	10,978 頭	神戸(14.8), 門司(0.9)
				雑	371,430	458,076 百斤	東京(35.6), 大坂(18.5)
輸移出額計	63,562,566		大坂(59.0), 神戸(7.4), 名古屋(4.9)	輸移出額計	43,066,552		大坂(56.3), 神戸(7.5), 東京(5.2)
うち輸入額	4,309,428		中国(6.4), 香港(0.2), 仏印(0.1)	うち輸入額	3,047,380		瀋州国(5.5), 中国(1.3), 香港(0.3)
(輸移出に占める輸出額のシェア 6.8%)							
輸移入							
米及び粍	6,024,326	538,001 百斤	神戸(60.4), 長崎(14.8)	米及び粍	658,453	97,783 百斤	台湾(52.4), 神戸(6.5)
小麦粉	2,308,843	16,351,903 斤	神戸(38.0), 門司(26.8), 下関(17.1)	小麦粉	849,456	9,339,473 斤	下関(54.1), 門司(40.1)
葉煙草	2,011,969	1,321,463 斤		小麦	744,877	121,725 百斤	
支那麻布	4,153,974			麦酒	790,753	2,417,505 利	大坂(36.1), 神戸(17.6), 名古屋(14.7)
	8,636,372		大坂(99.7)		4,040,957		門司(14.3), 博多(13.1)
<small>米及び小麦・トウモロコシ・エンドウ</small>							
					1,151,798		大坂
					3,821,229		大坂
					3,343,958		大坂, 東京
輸移入額計	66,459,271		大坂(44.4), 神戸(13.0), 門司(5.2)	輸移入額計	75,572,558		大坂 (48.8)
うち輸入額	15,761,366		中国 (12.3), 暹羅(0.3), 香港(0.2)	うち輸入額	7,540,704		中国(4.5), 瀋州国(1.9),
(輸移入に占める輸入額のシェア 23.7%)							
			イギリス(3.5), ドイツ(0.4)				アメリカ(1.0), オーストラリア(0.7)
			アメリカ(6.8)				(輸移入に占める輸入額のシェア 10.0%)
輸移入							
米及び粍	5,557,700	340,980 百斤	台湾(77.9), 門司(8.6), 大坂(6.3)	米及び粍	5,557,700	340,980 百斤	台湾(77.9), 門司(8.6), 大坂(6.3)
小麦	5,401,087	453,551 百斤	下関(38.4), 神戸(15.5)	小麦	5,401,087	453,551 百斤	下関(38.4), 神戸(15.5)
砂糖	1,484,799	11,221,242 斤	台湾(90.0)	砂糖	1,484,799	11,221,242 斤	台湾(90.0)
清酒	1,060,244	798,284 升	神戸(92.7)	清酒	1,060,244	798,284 升	神戸(92.7)
麦酒	284,655	422,833 斤	下関(31.4), 門司 (24.3), 博多(26.5)	麦酒	284,655	422,833 斤	下関(31.4), 門司 (24.3), 博多(26.5)
豆類	1,005,040			豆類	1,005,040		
	1,349,084		大坂		1,349,084		大坂
	12,664,077		大坂		12,664,077		大坂
	45,464,299		大坂		45,464,299		大坂
輸移入額計	261,016,348		大坂(37.1), 東京(10.7), 神戸(9.7)	輸移入額計	261,016,348		大坂(37.1), 東京(10.7), 神戸(9.7)
うち輸入額	25,659,064		瀋州国(2.5), 英印(2.0), 中国(1.7),	うち輸入額	25,659,064		瀋州国(2.5), 英印(2.0), 中国(1.7),
(輸移入に占める輸入額のシェア 9.1%)							
			アメリカ(11.1), スウェーデン(0.4)				アメリカ(11.1), スウェーデン(0.4)

資料：仁川税関貿易要覧

* 金額におけるシェアが量におけるシェアかはその末尾に「額」「量」として示した。

** 1939年データがないため1938年のデータを示した。

人参、糠（肥料）は大きく輸移出を増やしている。一方、輸移入では米及び粉が大幅な増加を見せる。直前の1937年は120,273百斤、1938年は21,788百斤であることから、1939年の貿易量の大きさが特筆される。この大幅な増加の背景にも干ばつの影響が考えられる。同様に小麦においても1937年の37,805百斤、1938年の188,371百斤を大きく上回り、凶作に対応する食料の輸移入がおこなわれたことがうかがえる。なお、食料品でこれに次ぐのが砂糖、清酒、豆類などとなる。晒金巾および晒シーチングは停滞傾向であるが、紙類、機械類は大幅な伸びを見せる。

仁川港においても、1939年には釜山港同様に食料を巡る混乱が見られた。また、農産物が全体に占めるシェアも徐々に低下していることがうかがえるが、輸移出においては米を中心とした農産物が一定の位置を保持しており、米の移出港としての性格を見ることができる。なお、農産物のシェアの低下傾向は輸移入において顕著であり、輸移入量の増加部分の多くは工業製品、とくに期間の前半は綿製品などの軽工業、後半は機械などの重工業が中心となる。しかしながら、1939年の混乱を別にしても、期間を通じて相当量の米や小麦などの食料が輸移入され続けていたことも指摘でき、食料の輸移入港でもあった側面がうかがえる。

貿易相手については期間を通じて大阪が大きな位置を占め、米を中心とした食料の移出先の中心となっており、移入される工業製品も多くが大阪からのものである。一方で、外国貿易の比重は小さく、1925年と1933年の輸出のシェアは7%程度にすぎず、もっぱら関西方面への米の積出港としての性格を見ることができる。ただしその後、1939年には満州国や中華民国（以下中国）⁴⁾ 向けの輸出がシェア38.7%と急速に拡大している。主な輸出品は精米で満州国向けのほぼ4分の1、中国向けのほぼ半額を占める。一方、主要な輸入相手先も中国と満州国で、満州国からの輸入の首位は1933年には粟、1939年にはコウリャン、次いで粟と、食料が重要な位置を占めている。内地貿易との単純な比較はできないが、1939年の混乱のなかでも満州国や中国向けには少なからぬ量の米が輸出されていたことをはじめとし、相当量の食料の輸出入がおこなわれていたことを指摘できる。他にも額は大きくはないが、1933年のオーストラリアからの輸入額507,423円全量が小麦（85,274百斤）、1939年の輸入額666,057円のうち490,773円が小麦（78,297百斤）で占められ、オーストラリアへの食料依存を指摘できる。その背景には満州事変を境に北米（アメリカ合衆国、カナダ）からの小麦輸入が縮小したことなどが想定される。このように、米に関しては植民地域内での供給体系が機能していたかもしれないが、それ以外の食料については少なからず国際情勢の影響を受けざるを得ない状況であったことがうかがえる。

V 新義州港

新義州は図4に見るように、外国貿易の占める割合が大きいことが特徴で、当時の朝鮮半島最大の外国貿易港といえる。釜山や仁川では輸出入額が総貿易額に占める割合が1割を超えることがまれであるのに対して、新義州は外国貿易が内地貿易を大きく上回る。表4から1926(昭和元)年の貿易の内訳を見ると、大幅な入超となっており（内地向け貿易はむしろ出超）、膨大な輸入に特化した港といえる。この入超という傾向は明治末の一時期と1917(大正6)年を除いて一貫して認められるが、満州国の建国と前後して、1930年代後半は出超に転じる。なお、新義州港と表記しているものの、貿易額の多くは鉄道によって占められている。例えば、1930年の経路別の貿易額（輸移出入）では鉄道が40,865,906円となり、水路（対安東）6,040,198円、海路4,673,095円を大きく上回る。また、1939年の経路別では輸出入は120,399,926円のうち

108,327,640円を鉄道が占め、これに鴨緑江水路経由の8,518,523円が続く。移出入においては14,103,117円のうち9,699,091円を海路が占め、鉄道は3,768,288円(その98%は釜山経由)となる。このように鉄道を主力にした満州国向けの国境の輸出基地としての役割を担うとともに、内地からの海上貿易を中心とした荷受け機能もうかがえる。

1926年の主要輸出品は綿織糸、木材、魚類で、魚類は鮮魚がほとんどを占める。輸入品では粟、柞蚕生糸、豆粕、木材、石炭などが主である。一方、移出では米及び粉と木材が2大品目となり移出額の8割以上を占める⁵⁾。移入では木材、綿織物、鉄が中心である。なお、輸出品首位の綿織糸の産地は久留米産が99%を占める。また、木材の産地は約半分(697,468円)を地元新義州産が占め、ほかに平壤と新義州間の要衝である新安州などからのものも認められる。また、魚類の約半分が釜山産であり、ほかに馬山、元山、浦項など各地からの入荷も見られる。輸入品は朝鮮半島各地に分散し、とくに粟の仕向先としては100ヶ所以上がリストアップされている。

次に輸出品の仕向先であるが、綿織糸の場合は合計1,132,055斤のうち安東(現丹東)、営口が中心であり、木材の場合は原木は撫順、挽材は安東、根は秦皇島などが首位であるが、いずれも東北部向けとなる。鮮魚の場合も大連、奉天、安東など、仕向先の傾向は同じである。輸入品の仕出地では、粟の場合には吉林省西南部、満州国北部からの貨物の中継地であった四平街をはじめ、鉄嶺、蒙古が上位にあり、いずれも東北部からの輸入である。柞蚕生糸や豆粕も安東が大部分を占める。

移出品の仕向地は、米及び粉では東京、広島(宇品)、大阪、名古屋が上位になっている。木材については原木や挽材では東京がその大半を占めるほか、板では博多がその大半を占める。これに次ぐ大豆は下関をはじめとした西日本各地に送られる。移入品の場合であるが、仕出し地は原木のうち大部分を樺太、次いで小樽による。なお、綿織物や鉄では大阪が9割近くを占める。食品では清酒のうち大阪が四分の三を、麦酒は名古屋、神戸、大阪等が挙げられる。

続いて1930(昭和5)年も移出入より輸出入が中心で、入超という傾向は変わっていない。貿易相手は中国が99%を占める。輸出品の中心は地下足袋、原木、綿織糸、その他綿織物、鮮魚など、軽工業製品が増加している。輸入品では粟の首位は変わらず、柞蚕生糸、石炭、豆粕が続ぎ、品目に大きな変化はない。移出では米及び粉、大豆が多く、木材は減少している。移入では綿織物が首位でこれに次ぐのが薬材化学薬製薬及調合品となり、食品類では清酒、麦酒が5年間で倍増している。移出の相手先方港湾の首位は東京(シェア21.6%)、次いで下関の

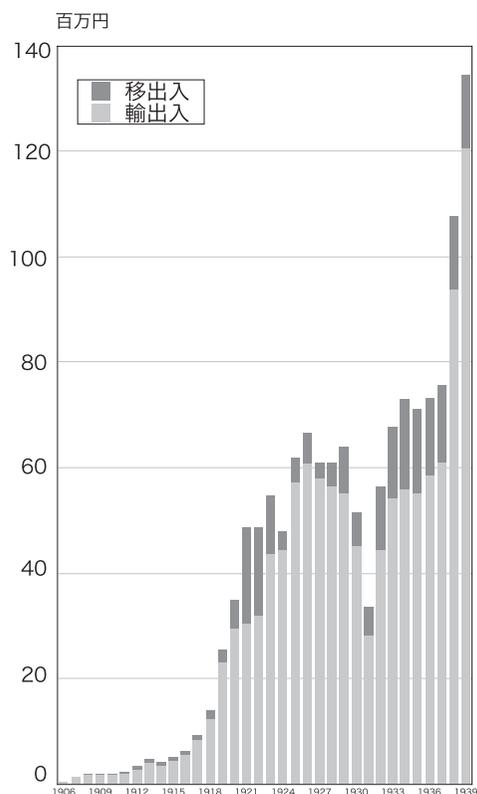


図4 新義州港貿易額の推移(百万円)

資料: 新義州税関貿易要覧

注 開港は1906(明治39)年、3月に税関出張所として開庁(龍岩浦を含む)、6月に支所に昇格、8月に龍岩浦に出張所開設(このため1919(大正8)年からは龍岩浦を含まず)、1923(大正12)年12月に本関に昇格。

表 4 新 義 州 港 主 要 貿 易 品 目 の 変 化

1926 (昭和元) 年		1930 (昭和5) 年		1939 (昭和14) 年	
主要品目	価額 (円)	量	単位	主要仕向地 (シェア%)	主要仕出地 (シェア%)
輸出					
繭織糸	1,343,738			安東(44.3)、营口(20.9)、久留米(99.4)	
木材	1,308,433	1,409,531 足	足		その他金沢等
魚類	686,886	1,076,277			粟稻ほか
		1,010,585	2,274,548 立方尺		車硝ほか
		970,546	1,380,646 斤		その他衣類
		927,700			絹子
		615,915	2,344,964 斤		ゴム底縮靴
輸出額合計	8,236,837	10,459,452			431,345 足
					安東
					京城(17.4)、久留米(15.9)、釜山(13.2)、大阪(4.7)
					木材
					4,165,173
					米及び材
					2,983,272
					83,776 石
					うち精米
					63,489 石
					安東(31.1)、奉天(23.4)、天津(23.4)
					魚類
					1,552,292
					10,737,370 斤
					輸出額合計
					74,023,946
移出					
米及び材	1,902,980	56,819 石		東京(30.5)、宇品(19.2)、大阪(16.8)、名古屋(14.3)	
木材	922,615	51,667		東京、博多、大阪、下関	
大豆	388,939	648,668		下関(21.7)、名古屋(14.9)、博多(13.2)、大阪(12.7)	
移出額合計	3,373,701	21,076			
					移出額合計
					2,268,878
輸入					
栗	16,700,212	2,849,112 百斤		四平街(27.9)、鉄嶺(11.9)、蒙古(6.8)	
精蚕糸	13,868,623	1,839,239 斤		安東(80.2)	
豆粕	5,712,490	1,172,527 百斤		安東(89.5)	
木材	4,532,610	55,035			
石炭	3,494,973	21,076			
輸入額合計	52,464,325	2,268,878			
					移出額合計
					2,268,878
輸移入額合計	11,610,538	12,726,330			
輸入					
栗	14,515,953	2,740,224 百斤		平安北道(46.2)、うち新義州(19.8)、咸鏡南道(26.9)	
精蚕糸	6,403,738	1,546,819 斤		大坂(37.1)、東京(21.3)	
石炭	3,951,583	895,255 斤		福井(58.9)	
豆粕	3,738,638	920,460 百斤			
輸入額合計	34,590,502	2,578,993			
					平安北道
					安東
移出					
原木	512,901	1,025,871 立方尺			
繭織物	243,901	801,200 万碼			
紙	232,215	1,966,059 斤			
清酒		74,926 升			
麦酒		111,100 利			
移出額合計	2,380,041	4,260,367			
					移出額合計
					9,428,151
輸移入額合計	54,844,366	38,850,869			
輸入					
原木	1,311,982	1,311,982			
繭織物	965,654	965,654			
紙	64,409	64,409			
清酒	461,351	461,351			
麦酒	160,383	160,383			
菓子	123,251	123,251			
清酒	121,298	121,298			
移出額合計	9,428,151	9,428,151			
					移出額合計
					55,804,131
輸移入額合計	55,804,131	78,696,912			

資料：新義州就関貿易要覧、新義州貿易概覧

(19.3%)、移入では大阪がシェア60.4%で圧倒的な首位を占める。

同様に、1939(昭和14)年も、輸出入が移出入を大きく上回る状況は変わりがないものの、1938年より出超に転じ、短期間に大幅な出超となっている。その大部分は輸出によるもので、輸出額は1937年の30百万円余から、38年には約55百万円、39年の74百万円と急増している。輸出相手は満州国が70百万円とその大部分を占め、1937年の盧溝橋事件、日中戦争へとという時代背景がうかがえる。また、輸出品目の上位には、その他金属及同製品、薬材化学薬、車両及同部分品、その他の衣類及同付属品、帽子、その他布帛及同製品等が並ぶが、多くは内地産品で朝鮮半島で製造されたものはむしろ少数である。朝鮮半島産が大部分を占める品目は、木材、米及び米粉であり、それまで移出の主力であった米が輸出に回されていることがうかがえる。輸出米は1937年に2,733石、1938年に42,887石であり、1939年に倍増しているほか、魚類も輸出を増やしている。これら輸出米の仕出し地としては大半を平安北道が占める。また、ゴム底綿靴の仕出し地は京城、釜山、久留米、大阪などである。さらに、仕向地であるが、精米は安東、奉天、天津等でいずれも1939年に急増をみる。ゴム底綿靴は安東向けがほぼ全量を占める⁶⁾。

一方、輸入品目の首位は粟で変化はなく、柞蚕糸屑、柞蚕生糸が続く。なお、石炭、肥料(うち豆粕1,524,511円)等も一定量を保っている。なお、この年の干ばつの影響からか、黍の輸入が1938年の885,591円(102,604百斤)から1939年には1,436,277円(125,969百斤)、コウリヤン(高粱)が24,608円(3,875百斤)から1,435,860円(141,605百斤)、豆類が1,501,588円(224,402百斤)から2,811,906円(326,510百斤)等の増加を見ている。なお、粟の仕向先は160地点がリストアップされ、半島全域に送られているが、新義州を含めた平安北道におよそ半量が仕向けられるのをはじめとして、咸鏡南道等北部が中心である。なお、量的には粟ほどではないものの黍125,960百斤(仕向地別シェア:新義州13.6%、咸興10.0%、定州9.5%)、コウリヤン141,605百斤(同:京畿道53.4%、忠清南道11.4%、咸鏡南道10.2%)、そば119,884百斤(同:新義州23.5%、平壤14.4%)、大豆232,694百斤(同:新義州51.9%)など、半島北部を中心に各地へ輸入食料を仕向けている。食料以外では柞蚕生糸の6割近くは羽二重・絹織物の一大産地であった福井へ、柞蚕糸屑は大阪や東京へ仕向けている。原木と製材はほぼ全量が新義州向け、豆粕は約半量が平安北道向けとなる。次にこれらの仕出地であるが、粟の重量比で65.5%が京奉沿線(北京—奉天(瀋陽))(うち四平街が45.8%)から仕出されている。同様に黍も125,969百斤のうち73.0%を四平街が占め、コウリヤンも141,605百斤のうち34.1%を安東、14.6%を四平街が占める。蕎麦も119,884百斤のうち52.3%を四平街、34.7%を奉天が占める。大豆は232,694百斤のうち公主嶺が64.5%、安東22.7%を占める。また、豆粕は249,859百斤の全量が安東からである。以上のようにこの期間を通じて満州国からの食料輸入を、新義州の輸入における大きな特徴として指摘できる。

これに対して、移出品目の首位は米及び米粉、次いで木材、肥料(豆粕含む)などとなる。なお、1938年の米及び米粉は1,937,757円(59,678石)で、1939年に大きく減少していることから、他と同様にこの年の干ばつの影響が考えられる。一方、肥料は28,453円、木材も104,203円から大きく増加している。大豆は1938年の221,686円から1939年の54,044円と激減し、農産物貿易を巡る混乱を見ることができ。移出品の仕向地であるが、米及び米粉は東京が全量の約8割を占め、原木では神戸、大阪となり、豆粕でも神戸が首位である。移入品目の首位はその他の薬材化学薬製薬、次いで絹人絹織物となり、綿織物は比重を下げていく。食品類では缶詰瓶詰及壺詰食物、澱粉、菓子、清酒などがあげられ、とくに缶詰類は1930年代半ばから増加していることがうかがえるなど品目の変化が認められる。移入品の仕出し地では清酒が大阪、麦酒が

神戸でその大半を占め、綿織物、絹織物、人造絹織物などでも大阪が首位となる。

以上のように新義州港の貿易は釜山港や仁川港と異なり、満州国や中華民国をはじめとした輸出入が主体であり、それらの地域からの資源輸入港として機能してきたといえる。柞蚕生糸や石炭などの工業原料とともに相当量の食料が期間を通じて輸入され、満州国の建国以降は同国向けの工業製品輸出港としての性格を強めている。

Ⅵ 清津港

上記以外の主要港湾として清津港の資料が得られた。それによって同港の状況を概略する。開港は1908（明治41）年で当時の貿易額は438,757円、1912（大正元）年には1,229,395円、1916（同5）年には3,025,514円、1921（同10）年には11,578,761円、1926（昭和元）年には19,374,647円、同統計期末の1932（昭和7）年には21,480,367円と順調に貿易額を拡大している。また、開港以来おおむね輸移入が輸移出を上回る入超の状況で推移している。

表5に示すように主要な移出品は大豆で、1932年の合計移出額約4割を占めている。また、移出先の首位が日本海側の敦賀であることも特徴である。大豆に次ぐ品目は魚肥、魚油、菜豆などである。なお、移入品についてはレールが首位であるが、全体の3位に相当する小麦粉が食料品の首位となる。これ以外の主要移入品としては生金巾生細布及び生シーチング、繰綿及打綿等の綿布、綿製品等の軽工業品に加えて、機械類も一定の移入額がある。一方、そのほかの食料品としては米及粳、砂糖、清酒、麦酒が挙げられる。

表5 清津港の主要貿易品目・1932（昭和7）年

主要品目	価額（円）	量	単位	輸移出における主要仕向地・輸移入における主要仕出し地(シェア)*
輸出				
鉄	792,460	13,064,475	斤	間島地方
綿織物	505,377	3,201,511	方碼	間島地方
魚類	88,295		斤	間島地方、南北満州
輸出額合計	2,240,621			
移出				
大豆	2,591,221			敦賀(16.3)、大阪(8.4)、神戸(7.6)、名古屋(7.0)、博多(6.4)
魚肥	965,038			大阪(21.5)、敦賀(20.4)、神戸(14.9)、東京(10.2)
魚油	810,111			神戸(83.2)
菜豆	503,290			神戸(45.9)
移出額合計	6,524,075			
輸移出額合計	8,764,696			
輸入				
大豆	787,258	158,487	百斤	南北満州
粟	687,190	169,541	百斤	南北満州
菜豆	377,280	93,666	百斤	南北満州
米及び粳**	33,540	5,004	百斤	ラングーン
輸入額合計	2,138,827			
移入				
レール	1,194,895			
生金巾生細布及び生シーチング	401,658	3,104,860	方碼	
繰綿及び打綿	345,729	7,591	百斤	
機械類	336,902			
小麦粉	347,421	4,219,868	斤	下関(74.0)、敦賀(14.4)
米及び粳	82,771	7,187	百斤	門司(37.1)、神戸(24.7)
砂糖	116,847	939,656	斤	下関(95.2)
清酒	107,770	106,361	斤	神戸(70.2)
麦酒	60,800	168,358	利	神戸(50.1)
移入額合計	10,181,966			
輸移入額合計	12,320,793			

資料：清津港貿易統計要覧

* シェアは量による。

** 1932年のデータが無いため1931年の数値

一方、輸入品の主力は大豆と粟、菜豆でいずれも建国間もない満州国が主要仕出地とされている。また、米はラングーンが主要仕出地とされている。輸出品では鉄、綿織物などで、いずれも間島地方（豆満江以北の朝鮮族居住地域 現在の吉林省東部延辺朝鮮族自治州一帯）向けが主な仕向地となっている。

清津も釜山や仁川と同様に外国貿易よりも内地との貿易に重心があり、新義州とは異なるものの、満州国との関係においては、食料の輸入と工業製品輸出という点で共通点も認められる。

VII おわりに

本稿では戦前の朝鮮半島の主要港の税関資料に基づいて、食料貿易の動向を検討してきた。その結果、当時の食料貿易の少なからぬ部分を米以外の食料が占めているとともに、朝鮮半島に向けても米や小麦を始め多くの食料が輸移入されていることが明らかになった。従来の朝鮮半島から内地への米供給という側面のみならず、内地から朝鮮半島、台湾から朝鮮半島、さらに満州国や中華民国をはじめとした海外からも相当量の食料の輸移入がおこなわれていた。実際に、仁川の1925年の米の輸移出量を一石135kgとして換算⁷⁾した場合、玄米・精米合わせて約15万トンに相当する。同様に100斤を60kgとして換算した場合、輸移入される米及び粳は約3万トンとなる⁸⁾。同様に小麦粉の輸移入量も約1万トンに相当する。新義州においても同様に、1926年の米及び粳の移出量は7千トン、対して輸入される粟は17万トン、豆粕は7万トンとなる。新義州は満州国向けの輸出で成長するが、同時に食料の一大輸入港でもあった。

表1に示される 朝鮮半島からの1925年の輸移出米の総量は同様に約62万トンと換算され、対して輸移入米は13万トン、輸移入小麦は3万トンとなる。これ以外にも大量の粟やコウリヤンが輸入されている。例えば1933年の朝鮮貿易協会編『最近の朝鮮対満州貿易』によると1928年の粟の満州国からの朝鮮向け輸入量は28.4万トン、1932年は21.9万トンなどである。これらの量の多寡を単純に評価することはできない。ただし、当時の内地の人口が60.7百万人（1926年）、70.1百万人（1936年）に対して、朝鮮の人口は19.1百万人（1926年）、22.0百万人（1936年）であり、内地のおよそ3割余であることを考えると、決して少ない量ではないと考える。

戦前期に朝鮮半島は内地向けの米の一大供給地であったことは明白である。しかし、その反面朝鮮半島が相当量の食料の輸移入に依存していたことも事実である。外国産の粟の大量輸入に支えられた米移出という構造がかかえる問題点はすでに早くから指摘されており、矢内原(1926)は外国からの米や粟の輸入に依存した朝鮮産米の増産計画が朝鮮農民の生活の向上、経済の充実にはずなならず、食料問題が生じることを指摘している⁹⁾。ここで矢内原の関心は朝鮮農民の経済状況に向いているが、それだけの問題にとどまるものではない。本来、他国の政治経済的な情勢に左右されることのない安定的な食料供給をめざすための植民地域内における米供給体系の確立であったとするならば、内地向けの米移出を補填するための大量の食料（粟）が輸入されることはすでに、安定的な供給におけるほころびと見なすことができる。事実、1939年の凶作によって植民地域内の米供給体制は瓦解するのである。

そもそも、米騒動の経験を機に国際的な米需給、価格変動の影響を受けない安定的な供給体系の構築を目指して、植民地域内の米の自給体制の構築が目指されたのではなかったか。実際1920～30年代にかけては植民地域内の米の自給体制は機能し、外国米の輸入は減少した。しかしながら、米生産をになう朝鮮半島の食料需要は朝鮮半島自体において賄えてはおらず、少なからぬ米や小麦、さらに粟などの輸移入によって支えられていたのである。この植民地域内の米自給体制が1939年の干ばつによる凶作に耐えきれなかった背景には、小麦や粟などの米

以外の食料を植民地域外に依存していたということがあるのではなかろうか。米の自給体制は構築できたものの米生産を支えた朝鮮半島の食料が少なからず海外に依存しており、その意味において安定的ではなかった、国際情勢の影響を受けざるを得ない側面を有していたと考えられるからである。実際、満州事変以降の国際情勢は当時の日本にとって厳しいものであったことは論を俟たない。

翻って今日のが国の食料自給、とくに米自給を考えた場合、聖域と謳われた米は確かに高い自給率を誇っている。しかし、米単体の自給率の高さだけの問題ではない。かつて大人一人が一年に消費する米の量が一石であったといわれたが、現在の一人当たりの年間の米消費量は0.6石を下回る。これは戦後の食料難の時期と同水準である。このような状況のなかで、米単体の自給率のみの議論では、あまりにも視野が狭いのではなかろうか。米以外の食料を含めた総体としての食料自給についての議論の喚起が必要である。それはおよそ戦前の20年間にわたって稼働した戦前の米自給体制、ただしそれは米生産を支えるために米以外の食料を海外依存していたものが、1939年に朝鮮半島をおそった干ばつ・凶作により崩壊したことを考え合わせると、よりいっそう鮮明となる。

付記 本研究を進めるに当たり、科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究「近代日本における工業労働者への食料供給と植民地経営をめぐる地理学的研究」課題番号:25580176 研究代表者:荒木一視を使用した。また内容の一部は2014年9月の日本地理学会(富山大学)にて発表した。

注

- 1) 樋口(1988)においても、朝鮮からの移入米が当時の都市住民の食卓を支えたことが、当時の資料や自身の経験を踏まえて活写されている。
- 2) 1928年は45.6百万円、1927年には53.6百万円でやや減少している。
- 3) 外国貿易が占める割合の低さはかわらないものの、輸出総額でも1,302,251円(1932年)から2,820,169円(1933年)と大きな伸びがある。
- 4) 国名は統計や年度によって、「中華民国」や「支那」が用いられているが本稿では中国に統一して使用した。同様に「北米合衆国」はアメリカ合衆国、「濠洲」はオーストラリアと今日一般的な表記とした。ただし、「仏領印度(仏印)」、「英領印度(英印)」等に関しては、原典の表記に従った。また品目に関しても基本的に原典の表記を採用している。
- 5) 精米輸移出の推移は1918(大正7)年までは両者が拮抗するか、移出より輸出が多い年も少なくない。新義州税関『鎮南浦・輸移出主要穀類品別十箇年対照表』によると移出が輸出を凌駕するようになるのは1920年以降である。米騒動を受けて朝鮮米移入が加速したことが推察できる。
- 6) 魚類や綿糸の仕向先は統計にない。
- 7) 総務省統計局で用いられた換算値で、農水省の長期的な統計でも採用されている。
- 8) また同年の米及び粳の輸移入量538,001百斤を、百斤を0.4石として換算した場合、約216,200石となり、輸移出米の1,122,300石の約5分の1に相当し、体積と重量によるずれはあるものの、おおむね輸移出の5分の1の量が輸移入されていたとみることができる。なお、百斤を0.4石とするのは『昭和産業史』(東洋経済新報社)に示される換算値である。
- 9) 石田(1928)は台湾に関して同様の米の商品化(台湾の農民が相対的に高価な蓬莱米を内

地に移出し、不足分を廉価の外国米によって補う)を指摘している。

文献

- 荒木一視 (2014) フードレジーム論と戦前期台湾の農産物・食料貿易—米移出に注目した第1次レジームの検討—, 山口大学教育学部研究論叢, 63-1, 31-49.
- 石田龍次郎 (1928) 台湾産米に就いて—その経済地理学的変動の記述と説明—, 地理学評論, 4-1, 1-14.
- 牛山敬二 (1980) 第一次大戦以前の日本の農産物貿易と農村, 農業総合研究, 34-3, 1-84.
- 大豆生田稔 (1984) 1930年代における食糧政策の展開 - 昭和恐慌下の農業政策に関する一考察 -, 城西経済学会誌, 20-2, 37-75.
- 大豆生田稔 (1993a) 戦時食糧問題の発生—東アジア主要食糧農産物流通の変貌— (岩波講座 近代日本と植民地 5 膨張する帝国の人流) 177-195.
- 大豆生田稔 (1993b) 『近代日本の食糧政策—対外依存米穀供給構造の変容—』ミネルヴァ書房.
- 野田公夫 (2013a) 『農林資源開発の世紀 「資源化」と総力戦体制の比較史』京都大学学術出版会.
- 野田公夫 (2013a) 『日本帝国圏の農林資源開 「資源化」と総力戦体制の東アジア』京都大学学術出版会.
- 樋口節夫 (1988) 近代朝鮮のライスマーケット. 海青社.
- 持田恵三 (1969) 米穀市場の近代化—大正期を中心として—, 農業総合研究, 23-1, 1-56.
- 矢内原忠雄 (1926) 朝鮮産米増殖計画に就て, 農業経済研究, 2, 1-32.